



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	学生アンケートによる授業改善の提案，とくに講義の改善と学生参加型授業
Author(s)	阿部，和厚
Citation	高等教育ジャーナル，8，16-30
Issue Date	2000
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.8.16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29697
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_P16-30.pdf



学生アンケートによる授業改善の提案 , とくに講義の改善と学生参加型授業

阿部 和厚*

北海道大学大学院医学研究科

Innovation of Classroom Teaching Based on Students' Opinions about Classes, with Special Reference to Lectures and Student-Oriented Classes

Kazuhiro Abe**

Graduate School of Medicine, Hokkaido University

Abstract — Hokkaido University performed teaching assessments by students for lectures and seminars in the first semester in 1999. Teachers of 597 classes received the assessment and 8,116 opinions about teaching from a total of about 40,000 questionnaires. About 2,000 general opinions about teaching were analyzed to propose teaching innovations. They provided details of improvements of teaching for students. The largest number of opinions was about usage of teaching media such as blackboards, overhead projectors, prints, videotapes and others. In particular, students described in detail how to use blackboards. The next largest number of opinions was about performance, including speaking. The next was about learning load and speed of teaching in the class. Opinions about syllabi were also frequent. Interactions between students and students or teachers and student-oriented classes were noticed. From these opinions, teaching innovations for lectures and student-oriented classes were proposed. These proposals are realistic student-opinion-based teaching innovations.

(Received on February 16, 2000)

1. はじめに

北海道大学点検評価委員会では、平成11年に学生による授業評価を授業アンケートとして全学的に実施した(平成11年度北海道大学年次報告書)。平成4年以來8年間継続してこの委員をつとめている著者

は、平成11年度には教員業績評価専門委員会(委員長 福迫尚一郎)の授業評価ワーキンググループの主査として、授業アンケート項目の決定、結果の解析に中心的に関わった。アンケートは、授業についての17の設問と自由記述から構成された。自由記述には、授業に対する学生の生の声が記載されていた。学生

*) 連絡先 : 060-8638 札幌市北区北15条西7丁目 北海道大学大学院医学研究科

**) Correspondence: Graduate School of Medicine, Hokkaido University, Sapporo 060-8638, JAPAN

による授業評価の目的は、授業の改善にある。学生の生の声は、そのまま授業改善のキーポイントそのものであり、寄せられた膨大な自由意見は授業改善をさぐる宝庫でもあった。これを整理することにより現実に即した授業改善マニュアルが作成できるともいえる。自由意見の一部は、報告書に記録したが、ここでは、さらに解析をすすめて、学生の声を受けた授業の改善を明かにする。

アンケートは、平成 11 年度秋に集計したため、全学部の前期の授業が対象となった。全学で 597 の授業がアンケートに応じた。調査に応じた学生数は、ひとりでいくつもの授業アンケートに応じたため、のべ約 4 万人となった。自由意見欄には 8116 の意見が述べられた。ここでは、これらの意見から各設問に対応し、一般化できる約 2000 の意見を書きだした。自由意見欄に記載された意見はきわめて多様であり、どれも授業改善に有用なものであった。以下には、できるだけ生の声を反映したいため、多くの意見を多面的に引用した。はじめに、設問と関連して、ついで授業の要素にそってまとめたので、取り上げた意見には重複がある。最後にこれをふまえて、とくに講義の改善と学生参加型授業のすすめをまとめた。

2. アンケート設問と関連意見

アンケートは表 1 の 17 設問について調査した。設問 12) と 16) をのぞく各設問については、5 段階尺度評価法により学生による評価をえた。この集計結果は、報告書にまとめた(平成 11 年度 北海道大学 年次報告書)。

以下、表 1 の設問を(番号にはこだわらず)内容別に整理し、自由意見欄に書かれた意見のうち、一般化できる代表的なものをほぼ原文のまま紹介する。また、内容別意見数を示した。各意見は、複数の内容を含んでいたたりするので、数値は概数と比率(%)である。ここで紹介する意見は、きわめて多いものについても 10 意見程度とした。設問は授業の構成要素に従って、順に、授業設計、パフォーマンス、教育媒体、授業負担、双方向性、難易度、そして学生の総合評価となる満足度となっている。

2.1 シラバスとその内容：シラバスと授業 (約 140 意見, 8.0%)

設問 1) <シラバスは、授業の目標、内容、評価方法

表 1. 平成 11 年度授業アンケートの設問

-
- 1) シラバスは、授業の目標、内容、評価方法を適切に示していた
 - 2) 授業は体系的に行われていた
 - 3) 教員の熱意が伝わってきた
 - 4) 教員の話し方は聞き取りやすかった
 - 5) 授業は、難解な概念、理論があっても、わかりやすかった
 - 6) 授業により知的に刺激された
 - 7) 黒板、スライド、OHP、ビデオ、教科書、プリント等の使われ方が理解の促進に効果的だった
 - 8) 教員は効果的に学生の参加(発言、自主的学習、作業など)を促した
 - 9) 教員は学生の質問・発言等に適切に対応した
 - 10) 授業の進行速度は適切であった
 - 11) 授業で要求される作業量(レポート、宿題、自習など)は適切であった
 - 12) 授業内容の難易度は適切であった
 - 13) 授業の履修目標を達成できた
 - 14) 授業内容と他の領域との関連について理解できた
 - 15) 授業により、新しい知識、考え方、技能を習得でき、さらに深く勉強したくなった
 - 16) この授業に対するあなたの出席率はどの程度でしたか
 - 17) 質問、発言、調査、自習などにより、自分はこの授業に積極的に参加した
-

を適切に示していた>

- ・ シラバスをみてもものすごく興味をもって授業にでた。実際におもしろい授業だったが、分野により内容が難しかった。
- ・ シラバスと違ってテストをされると言われたことは、面食らった。反則だと思う。
- ・ シラバスでは評価がレポートだったのに、テストになったのはなぜか。
- ・ シラバスは作るなら内容のあるものにして下さい。
- ・ シラバスと授業内容が一致していなかった。内容を書き直した方がよい。
- ・ 3年生がシラバスをもらえないのは不便である。1・2年生のみでは困る。
- ・ シラバスは配布されていない。
- ・ シラバスは見たことがない。
- ・ シラバスが足りず、手に入れることができなかった。多く印刷してほしい。
- ・ 目標がわからなかった。
- ・ シラバスに書いてあるように出席をとってほしい。

設問2) <授業は体系的に行われていた>

- ・ 非常に体系的な授業で理解しやすかった。
- ・ 体系的進行でわかりやすかった。
- ・ 毎回、講義の主題と結論が明確で大変わかりやすかった。
- ・ 授業ごとにその日に何をやるかがはっきりしていたのでわかりやすかった。
- ・ 体系的で詳細もわかる。
- ・ 教員が多すぎ、体系的でなかった。
- ・ シラバスに書いてあるように体系的授業にしてほしい。いま、どここの話をしているか現在地を見失う。
- ・ 授業があまり体系的でなく、内容がバラバラな印象をうけた。
- ・ 授業がおもしろくない。高校の延長のようだ。根本的講義体系の改善を望む。
- ・ 何をしたいか、何をやっているかが伝わってこなかった。

2.2 教師の授業法:教師と授業 (約400意見,22.7%)

設問3) <教員の熱意が伝わってきた>

- ・ とても情熱的授業だった。
- ・ 情熱がみえた。
- ・ 先生の優しさと熱意が伝わる授業だった。

- ・ 大変に情熱を感じる授業だった。情熱をもって人生を送っている人から教えていただき一生の宝になる。
- ・ 熱意がバリバリ伝わってきた。
- ・ 熱意があって興味を刺激された。

設問4) <教員の話し方は聞き取りやすかった>

- ・ 聞きとりやすく、分かりやすい授業だった。
- ・ 発声がよく、非常に聞き取りやすかった。
- ・ ゆっくり話したのは聞き易かった。
- ・ 話すのが早く、よく聞き取れなかった。
- ・ たまに小聲でぼそぼそいう、やめてほしい。
- ・ マイクをとおして聞き取りやすいが、語尾が消えていくことが多く、肯定か、否定かわかりにくい。
- ・ 聞き慣れない物質名をぼそぼそいうので、困る。
- ・ もっとはっきりしゃべってほしい。
- ・ 単調で、声が小さく眠くなる。
- ・ マイクをつかってほしい。

設問5) <授業は、難解な概念、理論があっても、わかりやすかった>

- ・ 高度な知識を教えていたにもかかわらず、とても分かりやすく、興味が深まった。
- ・ とても分かりやすく、知らないところも適切に教えてくれた。
- ・ 難解な内容にしては、理解しやすかった。
- ・ 基礎知識がないところから始められ、分からないところが多かった。
- ・ もう少し解りやすくして欲しい。
- ・ 講義は初めにテーマと目的を説明してから始まるので、理解しやすかった。
- ・ 授業をとおして何を理解させたいかわからない。
- ・ 独りよがりの授業であり、教授が内容を理解していない。
- ・ あまりにも授業内容が細かく、わかりにくい。もっと大まかなとらえ方がほしい。
- ・ 理論概念が難しすぎて理解できない。

2.3 メディア(教育媒体) (約700意見,39.8%)

設問7) <黒板,スライド,OHP,ビデオ,教科書,プリント等の使われ方が理解の促進に効果的だった>

- ・ 板書が達筆すぎて読めない。
- ・ 板書の文字が汚く、見づらい。
- ・ 黒板の文字が小さすぎて読めない。
- ・ 板書をはやく消しすぎないでほしい。

- ・板書が多すぎて、話に耳を傾けることができなかった。
- ・黒板の書き方をもう少し、整理してほしい。
- ・板書の量が多すぎる。
- ・体系的に板書してほしい。
- ・黒板に書かれる筆記体の英語がわかりにくかった。
- ・図をもっとわかりやく描いてほしかった。
- ・英語のスペルをはっきり書いてほしい。
- ・英語を多用するのはわかりにくい。
- ・OHPよりプリントがほしい。
- ・OHPのときにはプリントがほしい。
- ・OHPの文字の大きさが小さく読めない。
- ・スライドを変えるのが速すぎてノートをとれなかったの、プリントがほしい。
- ・プリントがあるのは良かった。
- ・プリントがわかりにくい。
- ・プリントにもう少し詳しい説明がほしい。
- ・ビデオを使って、わかりやすかった。
- ・ビデオの音声がかきにくい。
- ・ビデオには解説がほしい。
- ・ビデオ、OHPで本物をみせてほしい。
- ・教科書を指定してほしい。
- ・教科書が厚すぎる。

2.4 負担：作業量・負担（約150意見，8.5%）

設問10）＜授業の進行速度は適切であった＞

- ・進行速度もややゆっくりめで、授業内容についていきやすかった。
- ・講義のスピードが適切で、学習の意欲を最後まで維持できた。
- ・授業のスピードが自分には丁度よかった。
- ・初めはよかったが、終わりに近づくにつれ、スピードアップしわかりやすいとはいえなくなった。
- ・話すスピードが速すぎてノートがとりにくかった。大切なところは2回ぐらいくりかえしてほしい。
- ・量が多い。
- ・内容の量のわりに授業数が少なく、結果として難解さをもたらした。
- ・速すぎて、ノートをとるのにせいっぱいである。
- ・テスト時間が短いのももう少し長くしてほしい。
- ・授業内容が多すぎて頭にはいらない。
- ・進行速度をもう少し遅くしてほしい。

設問11）＜授業で要求される作業量（レポート、宿題、自習など）は適切であった＞

- ・毎回のレポートは量、質、期限ともにある程度、適当で、復習に役にたった。
- ・毎回のテストは大変だった。一限目はきつい。
- ・小テストが難しかった。ときどき、まだ習っていないことが問題に出て困った。
- ・要約7枚、論評3枚のレポートはものすごく大変だったが、完成したときはうれしかったし、力もついた。
- ・毎週のレポートはつらかったが、その週のうちに復習できたので、効率よく勉強できたと思う。
- ・レポート課題が難しすぎる。
- ・レポート課題の意味がわからないことがあった。
- ・レポートの作成に時間がかかった割に、成果があらなかった。
- ・レポートはかえしてほしい。できれば解説も。
- ・各單元ごとのレポートを課してほしい。理解しているかどうかを段階を追って確認してほしい。
- ・毎回、大変な思いをして宿題をしているのに、テストまでであるのは納得できない。

2.5 学生参加：学生との相互反応（約120意見，6.8%）

設問8）＜教員は効果的に学生の参加（発言、自主的学習、作業など）を促した＞

- ・私たち自身がグループで参加する授業があり、面白かった。
- ・皆で考えながら進行していったので、普通の講義以上に内容が身についた。
- ・学生が参加しやすい環境で、勉強によかったが、毎回の発表はつらかった。
- ・何回も発表の機会があり自主的に参加できたのはよかった。
- ・この授業のよさは学生が積極的に参加できることであった。
- ・いろんな学部の人と議論するのは初めは慣れなかったが、刺激をうけた。
- ・発表が自由だったので、毎回発表させてもらった。
- ・小人数の授業は、発言をうながすなどあり、とてもよかった。
- ・グループにわかれて皆で話し合うことが多く、時間が過ぎるのがはやかった。
- ・講義を聴くばかりの授業の多い中で、自分で考え、論じる授業は非常に興味深く、大学に何しにきたかを思い出させた。
- ・積極的に参加する学生を評価するという方針は非

常に効果的だった。

設問9) < 教員は学生の質問・発言等に適切に対応した >

- ・ 先生は自分の意見と異なる意見にも真剣に耳を傾けてくれてよかった。
- ・ 生徒からの質問に丁寧にわかりやすく説明してくれてよかった。
- ・ 学生の質問に毎時間こたえていらっしゃった姿に応援します。
- ・ もっと学生に質問とか、相互交流のある授業となれば積極的になれた。
- ・ もう少し学生に質問をした方がハリのある授業になると思う。
- ・ 大人数の授業なので、教員と生徒とのやりとりがない。
- ・ 学生への質問に媚びているようで気に入らない。
- ・ 忙しそうで質問をしても嫌そうだった。

2.6 難易度 (約 50 意見, 2.8%)

設問12) < 授業内容の難易度は適切であった >

- ・ とてもわかりやすかった。
- ・ 内容が難しかったが、自習を求められるものとして納得している。
- ・ 非常に難しく、演習も難しすぎた。
- ・ 内容が難しく、教科書を開いても分からなかった。
- ・ 難しすぎてさっぱり理解できなかった。一般教養のレベルでないと思う。はじめての人でも理解できるように解説してほしい。
- ・ 興味ある内容であったが、マニアックすぎて、ついていけなかったのは残念だった。
- ・ 授業の難しさとスピードについていけなかった。
- ・ ひたすら分かりにくい、もう少し研究して欲しい。この講義をうけてよかったところは一つもなかった。
- ・ 授業内容が難しすぎて何をいっているか解らない状態がつづいた。北大生はバカだということを知って、工夫してほしい。
- ・ 講義の内容が速く、簡潔すぎて何をしているかピンとこないことが多かった。かみ砕いて教えているのはわかるが、もっと現実的な例をあげて理解不足な点の内容がわかるようにしてほしい。

2.7 学生の満足度・達成度 (約 80 意見, 4.5%)

設問6) < 授業により知的に刺激された >

- ・ とてもわかりやすく、知的好奇心をそそる授業だった。素晴らしい。
- ・ 大いに知的欲求を刺激される授業です。これぞ大学における講義という感じです。
- ・ 刺激が多く、意欲、好奇心をそそる授業です。
- ・ 話の中身は、知的に刺激をうけるものだった。
- ・ やる気のでる授業だった。
- ・ よく理解できず、意欲がわかなかった。
- ・ 一般的にいえることだが、高校でたての学生のことを全く考えていない先生が多く、勉強する気が失せる。
- ・ 教える気がない先生がいて、時間の無駄と思う授業もある。

設問13) < 授業の履修目標を達成できた >

- ・ 実生活に関連させた内容で、非常にためになる点が多かった。
- ・ 実務家としての観点から新しいものの見方を教えて頂いた。
- ・ あいまいな知識が、だいぶ明確なものとなった。
- ・ 面白いことをいっぱい聞いたという満足感がある。
- ・ ものの考え方を教えてくれた授業だった。
- ・ 今まで習ったことのない新しい分野が勉強できてよかった。
- ・ むずかしいが、とてもためになる授業だった。
- ・ これぞ大学の勉強という感じでおもしろい講義だった。
- ・ 知的だけでなく、いろいろ刺激され、この授業をうけて本当によかったと心底思った。

設問14) < 授業内容の他の領域との関連について理解できた >

- ・ 考えかたが広がった。
- ・ 様々な分野の問題がみえてきて、大きな糧となった。
- ・ ほかの分野との関連についても話してほしかった。

設問15) < 授業により、新しい知識、考え方、技能を習得でき、さらに深く勉強したくなった >

- ・ 難しいテーマもわかりやすかったし、もっと知りたくなった。知りたくなるというのは勉強の基本だと思う。
- ・ 関連の本を読んでみたくなるような講義でした。
- ・ 関連の学問についてさらに詳しく知りたくなった。
- ・ どんどん興味をもつようになった。
- ・ 授業内容が浅かった。ものたりなかった。

2.8 出席・態度に対する学生の自己評価 (約 120 意見, 6.8%)

設問16) <この授業に対するあなたの出席率は何の程度でしたか>

(出席についての自己評価であるが,出席についての意見をひろう)

- ・面白くない授業に出席を強要されてつらかった。
- ・授業に出たいやつは出ればよいが,出たくないのは出なくてよいと思う。
- ・出席にしばられて出席したが,退屈だった。
- ・履修届をだした948人のうち,毎回まじめに出席しているのは300人ほどだった。いかに安易に単位をとろうとしているかがわかる。
- ・IDカードなどで,カードリーダー式の出席状況チェックにより,全体の何%かを割った場合,単位を認めなくする。
- ・900人について出席カードでとる。8割以上でない人にはテストを受けさせない。
- ・もっとしっかり出席をとったほうがよい。遅刻があたりまえになっている。
- ・できればテストなしの出席のみにしてほしい。
- ・部活などで欠席あつかりは納得いかない。
- ・出席に対して厳しすぎる。
- ・出席も評価にいらしてほしい。
- ・出席をとればもっと出たのにと悔やまれる。

設問17) <質問,発言,調査,自習などにより,自分はこの授業に積極的に参加した>

(自己評価であるが,上記に含まれるので省略)

その他

- ・質問コーナーが良かった。他人が何を考えているかわかり刺激となった。
- ・授業の終了時間を守って欲しい。
- ・時間内に終わって欲しい。
- ・先生は遅刻しないでほしい。
- ・うるさいときには叱ってほしい。
- ・長期の休講は痛い。代理でもやるべきだ。
- ・講義だけだと勉強しないので,適当な宿題を出して欲しかった。
- ・出席レポートをとってほしい。そうでないと休みやすくなる。
- ・日本の大学は専門教育すぎるといふ非難があるが,これがいかに重大か理解できる。
- ・クラス指定はないほうがよい。一般教養は文系,理

系が関係なく履修できるべきである。

- ・クラス指定は反対だ。人数が多いなら初めにレポートなどで選別するのがよい。

以上のように学生の意見では,教師のパフォーマンスに関する意見が多い。そのうちとくに黒板の使い方に対する意見,話し方とくに発音,発声に関する意見が多いことがわかる。また,随所に学生の甘えからくる意見もみられる。「出席さえすれば単位をみとめてほしい」「レポートを出せば,試験はしないしてほしい」「クラブ活動は欠席にしないでほしい」... ,入学さえすれば,あとは勉強しないで進学させ,卒業させてほしいというのである。この問題は「学業成績に関するアンケート調査(平成9年度北海道大学年次報告書)」でも明かであった。しかし,このような学生の存在も現実であり,大学の大衆化と関連して,対応が必要である。一方,真摯な修学態度の学生は少ないこともうかがえる。

3. 授業改善に関する学生の意見から授業改善への方向性

上記のような意見を,3.1 授業法,3.2 授業の工夫に関するものに大別し,さらに授業改善の方向を整理すると,つぎのようになった。一部は上記の意見と重複するが,生の声の内容を原文のままでなく,一般的に意味のわかる程度に要約して羅列した。

3.1 授業法に関して

(1) 黒板の使い方,板書

自由意見では黒板の使い方,板書に関する意見が最も多かった。板書は授業媒体の中心であり,学生はこれを頼りにしていることがわかる。

改善を要する点の指摘: 黒板の字が見にくい,字が小さい,字がよめない,字がきたない,字を大きく書いてほしい,もっと濃く書いてほしい,板書を工夫してほしい,板書をもう少し丁寧にしてほしい,メモのため後でみてもわからない,書くのが速すぎる,早く消しすぎる,板書が多すぎる,整理して書いてほしい,ノートを取りやすくしてほしい,ノートをとる立場としてもう少し詳しく板書してほしい,横に長く書かないでほしい,縦書きより横書きがよい,赤チョークは読みにくい,青チョークは読めない,行書・草書は読む訓練がされていないので楷書で書いてほしい

てほしい, などだった。

横文字の板書: 横文字の板書に対して, 筆記体が読めない, 筆記体が読みにくい, 英文字が読みづらい, 筆記体でわかりづらい, 英語をもっとはっきり書いてほしい, 板書(英語の筆記体)が読めないとノートをとるのが遅れて話の内容がわからなくなる, 英名をブロック体で書いてほしい, 英語だけでなく日本語でも書いてほしい, というような意見も多かった。

これらの意見からは, どのような板書がよいかはおのずとみえてくる。また, 横文字については, 現在の学生は, 筆記体のトレーニングがあまりされていないのかもしれない。ブロック体で書くか, あるいは, 必要な英単語を整理したプリントを配布することが勧められる。

(2) 話し方

話し方に関するものが2番目に多い意見であった。

改善を要する点の指摘: 発声, 発音, 話し方に関して, 話し方が速すぎる, 早口すぎてわからない, 早口で聞き取りにくい, 声が聞き取りにくい, マイクを使って話してほしい, マイクを使っているが語尾がはっきりしない, ことばが聞き取りにくい, もっと大きな声で説明してほしい, 声がこもる, 黒板に書きながら話さないでほしい, などであった。

良い例としては, 声が聞き取りやすかったという意見もあった。

発声と話し方は, 授業の基本である。演劇や弁論のときのような発声, 話し方の間, 強調, 緩急などが練習できたらと思う。

(3) 授業の速度, 内容の負担

授業の速度, 内容の負担についての意見も多かった。

改善を要する点の指摘: 進度が速すぎてノートをとれない, 授業の最後でスピードが速くなってわかりにくい授業となった, 急ぎすぎる, 進行速度が速すぎる, 回転が速すぎる, 内容が多い, 科目としての情報量が多すぎた, などである。

教員は, 講義内容を知りつくしている。また, 伝えたい内容も多い。しかし, 学生はその場で, はじめて聞く内容である。授業の内容は, 学生がその場で理解しながらついてこれる量と速さが必要である。このためには, 内容をかなり整理しておくことが求められる。

(4) 授業の構成

授業はあらかじめ立てられた計画にそって体系的に進行しなければならない。これに関してつぎのような意見があった。

最新のシラバスを配布すべきである, 体系的な授業だった, 補講しなくてもよいようにはじめから計画的にしてほしい, 教員が多すぎて体系的でなかった, 抽象的すぎる。

(5) 授業は, 学生との信頼関係

学生を小馬鹿にする, 学生をバカにしたギャグが多い, 自慢する口調と面白くないギャグは嫌いだった, ひとりで空回りしている, 教員の自己満足の授業だった, 教員が平気で遅刻してくるのは学生をバカにしている。

北海道大学の標語のひとつに, Be gentlemen がある。教員はその手本でありたい。

3.2 授業の工夫

(1) 論理が難解な内容

理論を身近なテーマでわかりやすく解説してくれた, 理論的な証明が多すぎてもう少し実践的内容がほしい。

(2) 学生との相互対応

生徒の意見をまとめて先生が答えた, 質問に丁寧に答えた, 電子メールで質問を受けつけるのはよかった, 出席の紙で質問できるのはよい, 毎回質問に答えてくれるのがよかった。

(3) 学生参加型授業

みんなで考えながら進行した, 発表準備が大変だがおもしろかった, 何回も発表の機会があって自主参加できてよかった, 発表形式は楽しい, 自らが積極的に動かなければ何もすることができない点は刺激的だった, 学生が積極的に参加できる点でよかった, ディベートはいざとなったら意見がいええることを教えた, 学生の発表が多いと内容に不安が残る, 自分で調べて発表して教員が補うのはよい, グループにわけてディスカッションさせてほしかった, 発表形式では参加した人と参加しない人とが同じ評価では納得がいけない, 学生がリードするのもよいが教員がきっちりフォローしてほしい。

(4) レポート

レポートを評価して返してくれるのはうれしい, レポートの添削が細かくて感激した, レポートが多すぎる。

(5) メディア

ビデオ教示が効果的だった、ビデオを使って理解を深めた、ビデオ・CDはおもしろかった、OHPで解説するのがよかった、図や表をつかって分かりやすかった、音楽をつかうなどの工夫があった。

OHPでノートがとれない、OHPがよめない、OHPばかりで速すぎる、スライドだけでは記憶にのこらない、スライドではその場で理解しても復習のとき思い出せない、スライドと同じ内容のプリントがほしい。

(6) プリント

プリントが難しすぎた、教科書と同じプリントはいらない、プリントが小さくて見にくい、プリントの構成をもう少しわかりやすくしてほしい、プリントの規格、デザインを統一してほしい、また、プリントが多くわかりやすい、レジメがあって効率よく勉強できた。

(7) 出席

出席をとらないのはいさぎよかった、普段は出席がすくないが試験では多すぎるので出席をとればまじめな学生だけが残るのでないか、出席は呼ぶだけでなく感想などを書かせておこなってほしい、出席をとる時間がおそくて出席しやすかった、出席をとってほしい、出席をとらないから出なくてもよいのかと思った。

出席をとるかどうかは、学生の大きな関心事である。真面目な学生像とともに、学生の甘えの像もみえる。

単位制では、出席を調査するかどうかは別として、授業への出席は必須の条件となる。単位履修における授業の認識は教員の側にも問題がある。授業に出席しないで、試験のみで単位履修を終了するということはありえない。

(8) その他

小人数でよい、講義というより講演でした。

授業時間中に休憩をとるのはよい、1時間半休みなくは疲れるので休憩がほしい、時間どおりに終わってほしい、時間をきちっと始めてほしい。

テストが多すぎる、テスト範囲が広すぎる。

学生は他にやることがあるので、レポートが多すぎる。

< 以下のような 500 人以上のクラスについては不評の意見が多かった (一部、上記と重複) 。 >

900 人授業で、500 人教室で、出ているのは 300 人であり、出席している学生にとって腹がたつ。

大人数クラスといって履修クラス指定するのはやめてほしい。2 回にわけて行ったらどうか。

様々な授業を取りたいのに、クラス指定は困る。

4. 授業法の改善—講義と学生参加型授業

上記の学生の自由意見と設問の集計から、つぎのような授業改善が求められる。アンケートに応じた授業形態では、講義が多いため、講義についての意見が多かった。最初に授業の一般および講義の改善、工夫について述べる。また、アンケートの集計で演習、小人数クラスとするだけでも効果があることが明確となった (平成 11 年度北海道大学年次報告) が、学生参加型授業についても述べる。

4.1 授業一般、講義の改善、工夫

講義は、教員というその分野の専門家が、概念、知識を整理して、学生に伝達するのに適している。これは、大人数授業が概して好評をえていたことにもあらわれている。しかし、講義は一方的伝授となり、学生との双方向性のコミュニケーションはとりにくく、教員は教えたつもりの教授錯覚に陥りやすい。教えたはずのものが、試験をしてみると、全体的に成績が悪い、半数近くも不合格というのでは、教員が学生に対応しきれていないといわざるをえない。一方、評価基準に達していなければ、不合格にするという「公正で厳密な成績評価」も必要となる。ここでは、よく用いられる「厳格な成績評価」を用いない。ことさら厳しくする必要はなく、公正かつ厳密な評価をすることにより。評価については後述する。

大衆化大学をむかえた今日、学生に求められる学力をつけて卒業させるには、講義には、より一層の工夫、教授技術が必要となる。

1) 講義、授業の事前の準備

(1) シラバス

授業改善の第一歩は、事前に授業を周到に設計することである。この設計はシラバスに表現される。「あなたの授業はどうして必要なのですか?」「あなたの授業は大学、あるいは学部でどんな教育的役割を担うのですか?他の科目との関係は何ですか?」「学生に何を学んでほしいのですか?何のためですか?」「与えられた回数の授業をうけることで、学生が何を身につけたといえるようになるのですか?」

授業設計では、学生が何をどの程度(どこまで)身につけたといえるようにするかを明確にすること、しかもこれをその機関の理念・目標と関連して明確にすることにはじまる。これにより、授業の方法、評価の基準も明確になる。すなわち、授業科目は、その大学、その学部での必要性から立案、授業実施されるものである。機関の理念にそって授業は周到に計画されていなければならない。これはシラバスに表現される(阿部ら 2000)。シラバスには、その科目の理念・目的、到達目標(ゴール)、授業の展開(各回の授業内容)、評価方法を明示する。これにより、授業は体系的に、計画的に展開される。学生は、事前に内容を把握し、予習、学習計画が立てられるようになる。

授業はシラバスにそって体系的に展開する。

シラバスは、一般には各学部の他の授業との関係で、一冊にまとめて印刷されるが、毎年修正されるはずであり、授業のはじめに授業日程や担当教員をいれた形で学生に配布する。

(2) プリント、スライド、OHP など

これらのメディアは、授業をわかりやすくするものとして、必要あれば事前に用意する。授業時間で不足のところを、時間を節約するために用いるものではない。

(3) 各授業の計画

シラバスにもテーマ等は表現されるが、ここでは授業のシナリオを構成する。この際、学生がどこまで知っているかを考慮する。授業は、学生の知っているレベルから入らなければ、学生はついていけない。

クラスにいろいろなレベル、多様な学生がいることを考慮する。とくに、大衆化大学となっている現状では、入学させた以上は適切な教育により、大学で学ぶことで付加価値をつけて卒業させる義務と責任がある。

教員は、学生がついてこれることを確認しながら、大学レベルの教育環境を提供し、学生の学習を適切にガイドしなければならない。

2) 講義、授業

(1) 時間

授業を時間どおりに開始する。

授業の終わりには質疑の時間をとれるようにする。

最後に個別の質疑に答えられるように、時間的に余裕をもつ。

(2) 進行

はじめに授業全体を紹介し、順序よく、体系的に進める。

はじめに目標、背景を明確にする。

本論を明確にし、よく準備されたことが伝わるようにする。

体系的に進行する。

重要な点は繰り返すか、言い方をかえて説明する。

できるだけ、具体的に、リアルに紹介、説明する。

最後に、全体をまとめ、重要な点が何かわかるようにする。

(3) 話し方

大きな声で、腹からの発声で、はぎれよく話す。

一番後ろの学生にも話しかけるように発声する。

大きな講堂はマイクを使う。

間の取り方、強調、抑揚に気をつける(何が重要かが伝わるように話す)。

ややオーバーな抑揚もよい。

速すぎない話し方をする(400字原稿用紙2枚で3分ほど)。

ノートのとれる速さの話し方をする。

助詞、語尾も明確に発音する。

アー、オー、を避ける。

聞き取りやすい発声、発音をする。

アイコンタクトをしながら話す。

黒板にでなく、学生の方を向いて話す。

(4) 話の内容

少しのユーモアはよいが、過度のユーモア、駄洒落は嫌われる。

学生を馬鹿にするとか、他の教員の悪口は嫌われる。

略語はできるだけ使わない。

聴衆の理解できる言葉で話す(専門用語に気をつける)。

内容を具体的に、現実的に、学生の身近な問題として述べる。

抽象的内容も具体的に丁寧にわかりやすく話す。

内容を、発想、背景、今日的発展性、社会性で現実的に述べる。

他との関連性についてもふれる。

現実的研究課題とも関連させる。

(5) 板書

大きな文字で、色濃く書く。

適正な色づかいをする。

楷書で書く。

横文字はできるだけブロック体で書く(筆記体は読めない)。

横文字は、できたらプリントを用意する。

黒板に整理して、体系的に書く。

番号は順次性がわかるように体系的につける。

ノートがとれる速さ、横書きで書く。

消すときも速すぎないようにする。

書きながら、早口で説明しない。

図、模式図、グラフも理解の速さで描き、説明する。

(6) 視聴覚メディア

近年は、電子情報メディア手法、教材が発達している。また、学生もテレビ、メディア、映像情報の時代に育っている。授業では、OHP、スライド、ビデオ、マルチメディア(CD-ROM、インターネット)をそれぞれの特質を熟知して効果的活用が勧められる。これを上手に利用する授業の評価はよい。

一方、画像、動画は情報量がきわめて多い。伝えたい情報量、伝達の速さを顧慮した注意深い利用が必要となる(阿部和厚 1996b)。

記憶しなければならない語句はメディアでは十分に伝えられないので、プリントを用意する。

板書のかわりにメディアのみを使うことは避けた方がよい。

メディアはあるリアリティを伝えるものとして有効である(とくにビデオ、写真)。

文字は、後ろからでも充分みえる大きさに用意する。

(7) 態度

教員の熱意が伝わるようにする。

専門の研究内容も紹介し、わからないものはわからないと伝える。

余裕のある態度で進行する。

専門家としての自信をもって対応する。

クラスへ貢献する態度の学生をほめよ。

詰め込みすぎにならない量で丁寧な紳士的な授業を展開する。

(8) 難易度

学生が知っているレベルからはじめる。

内容を学生の一般的知識に関連させながら授業をする。

学生の理解の速度にあわせて進める。

教師中心にならず、学生が何を身につけてほしいのかを明確にして、進行する。

学生が理解しているかどうかを常に鋭敏にモニターしながら話す。

(9) 双方向性

学生の名前を覚えて使う(学生に名前で質問する。質問があったら、名前で指名する)。

学生の発言をうながす。

学生の発言を歓迎する。

学生の発言、意見、質問を注意深く聴く。

学生の質問には丁寧に答える。

学生の意見には建設的に対応する。

学生の個々に紳士的に対応する。

学生が理解しているかどうかを鋭敏に感じとり、対応する。

さらに情報を求める学生に適切に対応する。

4.2 学生参加型授業について

今日の大学教育の在り方として、課題探求能力の育成ということがいわれ、学生参加型授業が注目されている。本大学でも最近さまざまな形の学生参加型授業が行われ、学生の意見でもかなりふれられている。また、アンケートの解析でも、双方向性、学生参加が促進される小人数の授業が歓迎されていることは明かである(平成 11 年度北海道大学年次報告書)。このような授業は、学生の作業、活動、行動を主体として授業が進行されるものである。一人の教師を中心に学生との双方向性を重視しながら授業を進める従来の演習と多少異なる。ここでは、学生同士の相互作用(インターアクション、グループダイナミクス)を重視する形式で、多くはグループ学習、グループ討論をとりいれ、教員は後ろで学生の学習を支援、あるいはチューターする役に徹する。これについては、本学で発行する「高等教育ジャーナル」に多くの論文、実践例が掲載されている(阿部和厚 1996a, 1998; 阿部和厚, 寺沢浩一 1997; 阿部和厚ら 1998, 1999; 小笠原正明, 細川敏幸 1998)。最近、工学教育で議論されている創成型教育、デザイン型教育もこの形式で行うことができる。

このような授業の方法を簡単に述べる。

学生参加型授業では、まず「学生参加とは何か」を理解しなければならない。これまでの大学の授業では、教員から学生への一方的知識伝達が授業の中心であった。これまでの演習、セミナーも教員が中心であった。学ぶ動機を明確に形成していたエリート学生へ一方的に知識伝授することで授業が成立してい

た。しかし、今日の学生の多くは、大衆化された学生であり、学ぶ動機も明確でない。また、情報が膨大化し、急速に変化する今日では、学生が自ら学んでいくことこそ重要になっている。学生参加型授業は、学生が自ら学ぶように設計された授業であり、教員はその設計と学習指導にあたることになる。

学生参加型授業では、小人数の学生をグループとして、互いに影響しあう状況をつくるのが効果的である。ここでは、教師一人が個々の学生に影響を与えるよりは、はるかに多彩な相互影響が多様な効果をあげる。小グループ学習形式では、はじめから小人数クラスとすることもよいが、大人数クラスでも小人数にわけて学習する設定とするとよい。

1) 学生参加型授業の設計

(1) 発言できる雰囲気：自由に発言できる雰囲気をつくる。ゲーム、他己紹介、ブレインストーミングなど様々な方法がある。

(2) グループ分け：グループにわけ、各構成員の個を注目していることを意識させ、参加意識を高め、個性を発揮できるようにする。小人数では5～6人、多くて10人ほどとし、できるだけ多様な個性の集団とする。ひとつの教室では「島」としてグループ作業をする。全体討論のための大教室を中心に、各グループが作業できる小部屋を用意するのがよいが、教員数にきびしい制限がある日本の現状では大教室でグループ作業をするのが現実的である。

(3) グループでの役割分担：グループ構成員は、それぞれ何らかの責任ある役割を担当するようにする。リーダー（最も重要な役割で、作業のゴールと作業進行の時間を管理する）、レポーター（報告者：クラスで発表する）、レコーダー（記録者：グループ作業の成果をまとめる、レジメとしてクラスに配布することも必要であろう）、資料作成係（発表資料、レジメなどを作成する、グループ員全員が共同する）、などである。また、様々な調査もグループ員全員参加となる。

(4) グループ作業の役割交代：作業が特定の人物に偏らないようにする。グループ作業は、全員で討論しながら各構成員が役割分担するが、何度もグループ作業をするさいには、役割を変えながら進行する。これにより、学生の自己発見、自己開発がなされる。たとえば、放置すると、リーダー格の学生、参加しない学生などが固定してきて、学生間に色分けができて

くる。これは不満にも結びつく。指導の重要な要となる。

(5) 作業のガイド：学生の理解と反応の速さにあわせ、具体的に何をするのかをガイドする。はじめはいそがず、順に熟させながら、進める。

作業のガイドは、教員の重要な役割となる。学生の自発的発想、成果を重視する場合には、教員は積極的に作業をリードすることをしない。適切な助言を与えながら、学生間で問題解決していくようにリードして行く。この点が従来の演習とやや異なる。

(6) 目標の明示：決められた時間に何をどこまでを完成させるか、行動目標と作業を具体的に明示する。

これも教員の重要な役割である。学習の内容、学習に必要な作業、そして、具体的に何をするのか、どこまでするのかをガイドする。たとえば、グループ作業のすすめかた、情報収集のしかた、インタビューのしかた、アンケートの方法、レジメのつくりかた、ビデオ取材のしかた、発表のしかた、発表資料のつくりかたなど、その科目の目標達成に必要なさまざまな手段を指導する。これらには各々短いレジメを用意するのが効果的である。これらは、必要となるときに各10分程度のミニレクチャーで行うとよい。ミニレクチャーは30分を越えないほうがよい。

(7) 評価：評価の方法は、その科目の目標により様々である。各学生の評価には、出席、討論、発表、コミュニケーション、作業の参加度な様々な項目、レポート、ポートフォリオなどで行う。必要あれば、試験も行う。出席は、共同作業であるので重要な指標である。また、多様な評価をおこなうが、これらは事前に学生に明示しておく。日常の学習の記録となるポートフォリオも有効であり、重視していきたい。

以上の全体設計のなかで、教室内の授業法には、「北海道大学FDマニュアル」に述べたように、つぎのような方法がある（阿部ら2000）。

(1) 氷解（アイスブレイキング ice breaking）：集団で自由に発言し、討論できる雰囲気をつくることで、ゲーム、コンパ、懇談会などが有効である。

(2) ブレインストーミング brain storming：きめられた時間内に、あるテーマについての発想をできるだけ多く提出する。このさい発言に批判的意見はいわない。

(3) 1対1討議 man to man discussion：あるテーマについてふたりで討論する。一方がリード役とし、

相手の意見をまとめ全体に紹介する。

(4) バズ討論 buzz discussion : あるテーマについて隣りあう数人で自由に討論する。ワイワイ (buzz) ということになる。

(5) KJ法 : 川喜田二郎 (1967) によって開発された個人による発想法であるが、グループ作業にも用いられる。カードに関連する連想事項を各グループ員から出させ、類似のものをまとめて、これを並べることで整理する。発想、論理の流れ、理屈付け、創造性の訓練によい。

(6) ディベート debate : あるテーマについて、肯定側、否定側、審判にわかれ、肯定側と否定側とがルールにもとづいて議論し、最後に勝敗の判定を審判が行う。自分の立場を離れて、理屈にもとづく論理を展開する。論理的思考、論理の組立、多様な物の見方を体得する訓練によい。

(7) ロールプレー role play : ある模擬環境を設定して、現実を模倣し、人物の心理様態などを理解するのによい。臨床場面での患者心理、裁判での被告の心理などの解析によい。

(8) フィッシュボール fish ball : 金魚鉢のことで、演技グループを中央に観客が取り巻く形、後で討論し、演技を客観視する。

(9) モックインタビュー mock interview : 専門家を囲む記者団の形で模擬記者会見で、たとえば、探検隊 (事前に文献等で調べておく) が新聞記者・雑誌記者 (新聞記事、雑誌の特集をくむ) にインタビューされる模擬的設定を演じる。ロールプレーの一種である。

(10) フォーカス・グループ・インタビュー focus group interview : ある現実的課題の解析、意見について、有能な司会者のもとに集団で自由意見をいう会で、集団内での相互影響を有用視する。たとえば、新商品の宣伝の効果の解析などである。

(11) 問題解決グループ作業 problem based learning : あたえられた具体的課題についてグループで、決められた期限内に解決案のレポートを提出する。期限は数10分から数日となる。たとえば、ある患者の具体的データをあたえ、その診断、治療方針をださせる。チュートリアル教育にも用いられるが、チューターはガイドに徹し、出てきたレポートをみて、さらに問題点を指摘し、解析を深めさせる。

(12) 討論学習 learning through discussion : ある教材 (文献、標本など) をグループにあたえ、まず各自がその内容をまとめる。ついでグループで討論し、定

められた時間内にまとめ、発表する。

(13) 異文化関係トレーニング intercultural communication training : 文化の異なる集団 (人種、国籍、職種など) を想定するグループに別れ、各グループは議論によりその特質を明確にする。ついでそこに別のグループから代表を派遣され、生じる異文化関係を明確にする (たとえば、商品の生産者と商社で商談)。これにより異文化間交流を模擬体験、解析する。

(14) 模擬研究 : グループに研究に用いた標本を与える。実験の材料と方法は公表しておく。各学生はそこから結果を読みとり、レポートを書く。ついで、グループ討論し、共同研究の形とし、成果をまとめ、発表する (学会発表の形式)。未知のものの問題解決の体験、訓練によい。

学生参加型授業では、さまざまな教室外学習を要求する。文献的学習の他に、その科目、あるいは学習テーマの現場に身をおくことがきわめて効果的である。実験室での体験学習もよい。できるだけ、社会に出て調査をさせ、そのテーマの社会性を把握させることも効果的である。こうして、大学と社会との連携学習が進行する。教師は、求められると必要な情報を提供する重要な学習資源となる。

成果は、何らかの形でクラス全体で共有する。これには発表形式が一般的である。メディアには、OHP、スライド、ビデオも活用する。これにはレジメも用意する。また、最近では、情報教育の成果で、発表に電子メディアを用いることも一般的となっている。すべての教室が電子メディア対応することも必要となっている。

2) 学生参加型授業の留意点

(1) 学生同士の相互作用

学生の質問、参加、討論、論議を歓迎する。

学生同士の相互作用を重視し、教師自身の疑問、回答はさしひかえる。

教師は、学習の方法について求められた場合、適切に指導する。

学生が質問してくる時間、討論する時間を十分に用意する。

学生が、難しい質問に回答することを歓迎する。

学生同士の討論を遮らない。

学生同志、学生と教員が対話できる機会をつくる (グループの形成など)。

(2) 学習のガイド

学習の方向, 方法を明示する。

学習の目標, 作業の目標を明示する。

評価の方法, 基準を明示する。

(3) 学習の時間

学習が完結するための時間を用意する。

教室外の学習の時間管理を具体的に指導する。

教室外学習の成果を具体的に把握し, 評価する。

(4) 社会性・現実性

学生参加型授業では中心となる部分であり, 学習テーマに関して, 現場・現実で学ぶ状況を組み込む(学生は将来像を具体視できる)。

礼儀, 社会背景などをふまえた社会的行動を指導する。

(5) 発表

様々なメディアを用意する。

メディアを用意するために時間管理を指導する。

3) 学生参加型授業の効果

学生参加型授業では, 一般にグループに分け, 各グループ員の能力を最大限に引き出し, 学生間で問題解決していくように設定する。しかも, それぞれのグループの学習進行状況は常にクラスに公表され, 内容はクラス討論を通じて批判, 修正される。多くのテーマは関連の社会や現場へ出て調査する。ここではグループやクラス内での相互反応 interaction 相互影響 group dynamics が重視される。

このような授業は, 入学直後の学生から開始することが重要である。入学早期の一般教養教育では, 知識詰め込み型授業よりも, 問題提起・問題解決型授業が重要であり, とくに, この問題は, 学生が自らのものとして自覚できるものがよい。

学生中心の参加型授業では, 教師は, 知識伝授でなく, 野球チームのコーチのような役割を演じる。教師は, 必要な場面に応じて, グループ学習の方法, 調査の方法, 調査場所の紹介, インタビューの方法, OHP 発表資料の作り方, 35 ミリスライドの作り方, ビデオ撮影と編集の仕方, 発表の仕方, 話し方, ことばづかいなど様々なことを指導する。これらの作業はできるだけクラス全体の中で行う。

教員の授業評価は, 授業の生産性でも測られる。教師中心の一方通行的な知識伝授中心授業では, その成果は教えたことを覚えているかどうかで測られる。一般には, 暗記が中心で, 問題解決能力の評価までは

いかない。一方, 学生中心の行動的学習型, 参加型学習では, 学生に現れる教育の成果は, 実に多様で種類も多い。活発な討論能力, コミュニケーション能力, リーダーシップ, 協調性, 共同作業能力, 責任感, 社会性の把握, 能動的行動力, チームワーク能力, 知識発見, 自己発見, 自己能力開発など, 高い教育効果, 大きな教育の生産性を示す。とくにここでは, 教師が教えなくても, 知識を発見していることに注目したい。しかもグループを構成する学生の多様性から, 一人の教員によるよりも多様な幅広い視野の知識の発見と提示がある。そして, 社会に出ていって調査する参加型授業では, 自らの社会的役割を具体的に自覚し, 職業的将来像を社会に鏡影し, 自己認識をもつことで, 学習意欲の原動力を得ることもある。

学生参加型授業は, 「課題探求能力の育成」を中心とすべき 21 世紀の大学の授業において, 科目の目標に応じて方法は変わるであろうが, 中心的授業に(阿部 1996ab, 1998; 阿部・寺沢 1997, 阿部ら 1998, 1999; 小笠原・細川 1998)と位置付けられる。

学生参加型授業については, 私どもの高等教育開発研究部で多くの研究と実践を行い, このジャーナルに発表しているのので, 具体例はそちらを参照されたい。

5. 成績評価と単位

成績評価は, 授業の一環である。成績評価については平成 9 年度の全学アンケート調査「学業成績評価について」で詳細に述べた(平成 9 年度北海道大学年次報告書)。ここでは簡単に述べる。

成績評価には, 科目の進行途上でフィードバックを目的とした評価と, 終了時に目標に達したかどうか, どの程度達したかを評価するものの 2 種類がある。途中の試験は, 学生の学習進行と教師の教え方との関係をモニターし, 教師の授業法および学生の学習方法にフィードバックし, その改善, 修正をはかることを目的とする(形成評価)。一方, 最終試験は, 成績と直接関連する(総括評価)。

また, 評価のための試験には, 様々な方法がある。たとえば, 論述試験, 口頭試験, 客観試験(マルチプルチョイステスト), 実地試験, 模擬実地試験(モデル, コンピューターなどで実際と同様の設定を模擬的に作り試験), 観察試験, レポート, 論文などである。これはシラバスの評価に明示し, とくに各試験

方法の比率を書き込むことも勧められる(たとえば,出席30%,筆記試験30%,レポート20%,平常点20%)。

試験は従来ペーパーテスト中心で,この成績だけで,評価する傾向があった。しかし,前に述べた記憶中心でない授業では,観察評価が中心となる。観察評価では,多くの項目のチェックリスト,あるいは適当数の項目の尺度評価(5段階あるいは4段階評価)で行われる。くわしくは,このジャーナルのFDマニュアル(阿部ら2000)をご覧ください。

成績評価では,最近,単位の時間計算と関連して出席をどうするかが問題となっている。

大学の授業では,予習15時間,授業出席が15時間,復習15時間,総計45時間で1単位の学習と定義している。通常の講義であれば,1回90分授業を週に1回,1学期15週行くと,2単位という計算になる。語学や実験は,授業に参加することが学習の中心となるので,講義の半分の1単位計算としている。

単位制では,学生の学習可能な時間を考慮して,単位の上限が算出されている。これは4年間で124単位,半期に15単位ほどとなる。これは基本的には,1日8時間,週に45時間という労働時間の上限と同様に計算される。これでは,週5日の授業日で1日2から3コマしか履修できない計算となる。しかし,単位に相当する学習ということが定着していない日本の大学では,学生は隙間のない過剰な単位履修をする傾向にある。授業に出席しさえすれば,単位が認められる,あるいは,出席しなくても,履修届けをだしていさえすれば単位が認められる,ということが現実に行われている。このため単位履修の上限が最近みなおされている。

しかし,日本の現状では履修科目数を制限するのみでは,学生は余裕のある時間を勉学以外に活用するであろう。また,1単位45時間の学習を15時間の授業で提供するということは,教員の授業責任の明確化でもあり,教員に授業法の変革を求めていることでもある。出席しなくても試験だけでいけばよいという意見をいう教員がかなりいるし,これが伝統となっている大学もある。しかし,学生がほとんど出てこないとか,本当に授業に出なくても試験だけで合格できるというのでは,大学の授業の価値はなく,これを肯定するようでは何かが間違っている。授業は,授業外に30時間勉強してもらうための指針でもあるので,単位制では学生は授業に出席することは必須の条件であり,そのような授業をすること

は教員の責任でもある。単位の上限を明確にすることは,教員が学生の出席を前提としなければならないような授業をすることの責任を問うことである。

一方,最近の単位の上限の議論は現実に即しない面もあることに留意したい。社会的責任のうえで,明確な出口学力が問われる医系(とくに医学・歯学部)では,単位の上限をこえる2倍近くの履修をせざるをえないカリキュラムとなっていて,ほとんどの科目は必修となっている。また,一般の学部でも必修科目が不合格となり,再履修を要する科目が多いときには,上限をこえた履修もやむをえないこともある。

学生の意見には,甘えの意見も少しみられるが,甘えばかりではない。真剣な生の声はそれ自体,授業改善のマニュアルであり,単位履修に対しても,出席に関する意見にもみられるように,まさに適正な意見である。厳格な成績評価ということがいわれている(平成10年度 大学審議会答申)。しかし,成績評価は厳正であればよい。このような評価をすることで,評価とは何かということが学生に明確に伝わる。妥当な評価をすることも,授業改善に結びつく。成績評価は,単に学生を評価するのみならず,教える側の評価でもあり,「このごろの学生は勉強をしないので,まともに成績をつけると半分も合格しない」というのであれば,教え方が間違っている。

6. おわりに

大学における授業改善に関する文献は少なくない(伊藤秀子と大塚雄作1998, Eble 1976, Bligh 1974, Davis, Wood, Wilson 1983)。これらのほとんどは,教師の視点,教師の立場で述べられている。北海道大学でも,平成7年度の点検評価委員会で各学部で工夫のある特徴的授業を調査し,例示した(平成7年度北海道大学年次報告書)。今回の授業改善はアンケートによる学生の意見から読みとったものをまとめた。大学の授業は,学生中心であるのが原則であるという。今回の授業改革は学生の側から求められる授業改善に徹したものであり,ここに特徴がある。また,整理した学生の声も授業改善案そのものである。

よせられた意見はきわめて多く,さらに,詳細な改善点も提供できるが,ここでは現実的な点にしばった。今回の形式の学生による授業アンケートは,当分

は毎年実施される。しばらくは、同様の意見が出てくると予想される。これらの意見の整理の仕方をさらに工夫して、授業改善の内容を拡大していくこともできる。また、評価の受け手である教員は、ここに述べられている意見、改善案を参考に、実際に授業改善をすることにより各授業は確実に向上し、評価もよくなるであろう。学生による授業評価の目的は、授業改善にあり、教育の効果を上げていくことにある。

謝辞

資料の提供をいただいた平成11年度北海道大学点検評価委員会教員業績評価専門委員会（委員長 福迫尚一郎）に感謝する。また、意見の整理にご協力いただいた北海道事務局総務課企画室 市山準一、三本木毅事務官に感謝する。

文献

- 平成7年度北海道大学年次報告書（1996）
 平成9年度北海道大学年次報告書（1998）
 平成11年度北海道大学年次報告書（2000）
 阿部和厚（1996a）,「大学における教授法の研究」,『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』1, 170-189
 阿部和厚（1996b）,「大学教育における視聴覚教育—特に医学教育を中心として」,『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』1, 190-208
 阿部和厚,寺沢浩一（1997）,「大学教育における知識伝達中心授業から学習中心授業への転換—多人数クラスにおける学生中心小グループ学習モデル」,『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』: 特別号, 128-137
 阿部和厚（1998）,「教育の生産性とその評価」,『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』3, 138-142
 阿部和厚,小笠原正明,西森敏之,細川敏幸,高橋伸

行,高橋宣勝,大雄二,小林由子,山鋪直子,大滝純司,和田大輔,佐藤公治,佐々木市夫,寺沢浩一（1998）,「大学における学生参加型授業の開発」『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』4, 45-65

阿部和厚,西森敏之,小笠原正明,細川敏幸,高橋伸幸,高橋宣勝,小林由子,山鋪直子,大滝純司,和田大輔,佐藤公治,佐々木市夫（1999）,「大学における学生参加型授業の開発(2)」,『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』6, 156-168

阿部和厚,西森敏之,小笠原正明,細川敏幸,大滝純司（2000）,「北海道大学のFDマニュアル」,『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』7, 29-125

伊藤秀子・大塚雄作編（1998）,「ガイドブック・大学授業の改善」有斐閣選書

小笠原正明,細川敏幸（1998）,「科学リテラシー教育の実践：科学ジャーナリズム」,『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』4, 79-87

Eble, K.E.(1976), "The Craft of Teaching. A Guide of Mastering the Professor's Art." Jossey-Bass（養輪成男訳 1988）『大学教授のためのティーチング・ガイド』玉川大学出版社

Bligh, D. A. (1974), "What's the Use of Lectures?" Penguin Books（山口栄一訳 1985）『大学の講義法』玉川出版社

Davis, B.G., Wood, L., and Wilson, R. (1983), "ABC's of Teaching with Excellence. Teaching Innovation and Evaluation Services", University of California（香取草之助監訳 1995）『授業をどうする！カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』東海大学出版会

川喜田二郎（1967）,「発想法」中公新書136, 中央公論新社

寺沢浩一,阿部和厚,牛木辰男（1997）,「作文添削の試み—一般教育演習「ことばと医学」から」,『高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—』2, 243-256